

講義1 「中学校保健体育における武道の必修化の現状」

中学校保健体育における武道の必修化について、(1)武道必修化の経緯、(2)剣道に関する実態調査、(3)学習指導要領と剣道指導要領から内容の対比とその説明、(4)学習内容の取り扱いの説明、(5)単元の計画の5点についての講義があった。教育基本法の改正に伴う伝統と文化を重視した教育内容の実施にあたり、中学校の1・2年で武道が必修化となったこと、また学習指導要領でも、「知・徳・体」を重視する観点から特に技能面・態度面から武道の対人性、伝統的な行動の仕方といった点が重視されるようになってきたことについて説明があった。実態調査では、全国的に柔道を選択する学校の方が、剣道を選択している学校よりも多い中で、剣道で学ぶ有効打突の条件(気・剣・体の一致)などを理解させ、実践することの大切さについて話があった。また、その授業を行うためのヒントとして実践事例が紹介された。

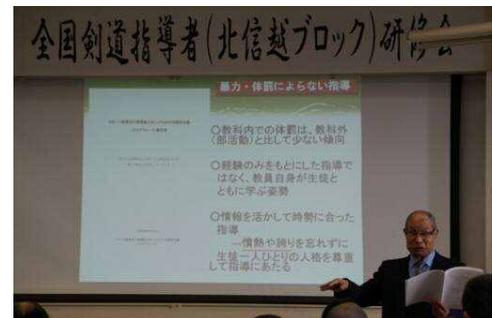


講義2 「学習内容・安全指導・現状と課題について」

剣道を学習する場となる剣道場もしくは体育館において、特に床の安全について配慮する必要がある。また、剣道を学習する際に用いる竹刀や防具、木刀などの用具では、安全面はもちろん衛生面についても配慮が必要であるとの話があった。

講義3 「体罰・暴力によらない剣道指導」

文部科学省から出されている「体罰の禁止及び児童生徒理解に基づく指導の徹底について(通知)」を確認しながら話がすすめられた。学校教育法第11条では、「体罰を加えることはできない」とされていることから、教員の指導力の向上と意識改革が必要であるとの話があった。そのためにも、剣道の指導で多くみられる「欠点を指摘する指導」ではなく、「褒める指導」に意識を変えて、努力する必要があるとの話であった。



実技1 「剣道授業における楽しい動機付け」*新聞刀のつくり方を含む

「剣道の歴史と特性」では、剣道の歴史をたどる中で、「殺人剣」→「活人剣」への変化、実際使われていた鎧から稽古を目的として剣道用具が発案されたこと、刀から木刀さらに竹刀へと形を変えていった歴史から、剣道に対して興味を持たせる方法について話があった。

「剣道授業における体ほぐしの運動」では、初対面の相手との自己紹介からはじまり、まずジャンケンゲームから行った。互いに前に出した手のひらを合わせ、ジャンケンをして勝った時に相手の手のひらをたたくことで相手との攻め合いを楽しむゲーム、同じくジャンケンをして勝った時に相手の手のひらをたたくが、負けた時には自分の手を守る攻防を含めたゲーム、さらに面・小手・胴の3種類をそれぞれポーズとして用いることで、実際の技の応酬に近い形をとった



ゲームが紹介された。

「武道的素養となる遊びの体験」では、新聞を縦にして竹刀で切り落とす試し切り、さらに切った新聞紙を丸めてボールにしたものを打ち落とす。さらにさまざまな大きさのボールを打ち合うボール打ちが行われた。

「武道的素養を培う動きづくり」では、体全体を使った剣道の基本動作の指導法を学んだ。まず、大きな声での発声からスタート。気・剣・体の基本となる気を念頭に入れ、大きな声を出す。全身の筋肉がほぐれたところで準備運動。そして、ランニングからスキップ、さらにツーステップからの踏み込みなど体全体を剣道モードに整えた。そこから手刀を使つてのトレーニング。面、小手、胴などの技を互いに出し合い、声を出しながら技の攻防を競った。

実技2「剣道具の無い場合の授業例 リズム剣道を含む」*新聞刀、竹刀または木刀の活用

「相手を尊重した伝統的な行動の仕方」では、礼の考え方から礼法（立礼、座礼）、正座などの基本的な動きを確認した。普段おろそかになりがちこれらの諸動作では、礼は相手への礼であると同時に己への礼であることも説明された。また、相手と正対した時の立礼、座礼については、15度、30度といった角度だけでなく、姿勢についても背筋を正した礼を確認した。正座では、左座右起と跪居を意識した座り方を確認した。特に、跪居の動作は省略されがちであるが、この動作を意識することにより、上半身をまっすぐ下ろすことで正しい姿勢で座ることができ、今後も指導する際に重視していきたい動きの1つであった。



「相手の動きに応じた基本動作について」では、まず自然体での構え、相手への目付け、剣先を正しく相手に向ける中段の構えを学んだ。同時に、竹刀の各名称、竹刀の握り方、さらに提刀、帯刀、納刀、蹲居などの基本的な動きを確認した。よどみのないスムーズな動きの中でこれらの動作を繰り返すことで、剣道の品位を高めることができるとのことであった。そこから上下素振り、正面素振り、斜め素振りなどの基本的な素振りを行い、相手と向かい合い、打ち方と打たせ方の確認をした。

「段階的な基本打突の指導について」では、竹刀を使った体ほぐしにはじまり、基本となる技を確認した後、リズム剣道を行った。リズム剣道とは、フォークダンス曲の「ネリーブライ」に合わせて、入る、打つ、抜ける、残心までの基本動作を行うもので、リズムに合わせて動くことで、自然に基本的な動きを習得できるというものであった。



研究協議 全講師

8グループに分かれて2つのテーマについて協議した。

テーマ1 「実践発表についての感想」

テーマ2 「剣道授業の現状と課題」



実技3 「木刀(竹刀)の使用による授業例 ー木刀による基本技稽古法ー」

「木刀基本技稽古法」を教材とした場合の指導の展開についての説明では、まず竹刀ではなく、木刀を使うことで、実際の刀に近い動きをすることができることで生徒の関心を高めると同時に、剣道の理合についてもあわせて学ぶことができることから指導に活用できるとの話があった。

学校の実情によっては木刀ではなく、手刀、あるいはペットボトルや新聞刀、ソフト木刀といったもので代用することも可能とのことであった。基本1から基本6までの中で、相手との間合、自然体の構え、打ち方、打たせ方、目付などを確認した。講師の先生方の模範演技で細かい所作・動きを確認した後、ペアになり互いに動きを確かめ合った。



実技4 「剣道具のある場合の授業例Ⅰ しかけ技(判定試合を含む)」

この講義から防具を着装することとなった。防具の着装については、胴紐の簡易的な結び方や帽子状にする手ぬぐいの折り方・かぶり方などを学んだ。

次に面をつけて基本となるしかけわざの練習を行った。その場で打突部位を打つ、一足一刀の間合から送り足で打つ、をそれぞれ3回、一足一刀の間合に攻め入り、踏み込んで打ち抜け残心をとるまでの動きを往復で行い、基本的な動きを学んだ。

その動きを元に、グループを作り、気剣体を判定基準とした基本打突による判定試合を行った。4人から5人で1グループを作り、2人で交互に基本打ちをして、残りの人たちが気・剣・体の3点に着目して優劣を判断した。絶対評価として、気・剣・体のそれぞれを分担して、1人が1点のみを評価する方法も行った。観点を明確にすることで、細かい視点からそれぞれの生徒のよい所を見つけ出すことができ、1度判定が終わった後にはグループ全員でそれぞれのよかった点について意見交換をした。



実技5 「剣道具のある場合の授業例Ⅱ 応じ技(簡単な試合・評価を含む)」

実技4に引き続き、防具を装着したまま、応じ技の指導例の説明からはじまった。「面抜き胴」を用いた判定試合を、気・剣・体を判定基準とした試合をおこなった。

また、約束練習として、①引き胴→剣先が触れる程度の距離→1歩攻めて→面抜き胴→残心、面→受けて・鏝迫り合い→引



き胴→剣先が触れる程度の距離→1歩攻めて→面抜き胴→残心の2パターンを練習した後、ポイント制の試合(制限時間内にお互いが何本決めることができたか)を行った。いよいよ互いに間合や攻め合いなどを意識しながら技を繰り出す場面に入り、気・剣・体の一致を重視した動きや判定が求められた。今回はじめて防具をつけ、竹刀を持った受講者も大きな声を出しながら、互いに駆け引きを行いながら、思い切った打ちを展開していた。実戦的な指導の後には、防具を結束の仕方を全員で行った。



質疑応答

質問 カーボン(科学繊維製)の竹刀を稽古や試合で使用してもよいか。

回答 日本中体連の公式試合には使ってもよいことになっている。高体連でも使ってもよい。試合で使う生徒は少ないが、練習で使われることは多い。全剣連でも使ってもよいことになっている。

質問 今回、発表された指導案や実践記録、他ブロックで発表された内容などを公開していないか。

回答 5ブロックで開催されている講習会の内容は日本武道館で集約して冊子にしている。(各県の学校剣道連盟等に配布)しかし、発表された資料についてはなく、2日間で配布した資料がそのものですから、研修会を受けた方が職場や地域でその内容を広げていただきたい。



質問 防具を着けて打ち合うと怖がってしまう生徒がいる。どうしたらよいか。

回答 打つ方も打たせる方も躊躇することがある。だから教材・教具を工夫することが大切。1年生で“いたくシナイ”を使い、慣れてくると普通の竹刀を使えるようになる。ハードルをどうクリアさせるか配慮や工夫が必要になってくる。

質問 中学校の体育授業は楽しいだけでよいのか。

回答 楽しいをどう捉えるか。楽しいだけでは良いわけがない。“できなかったこと”が“できるようになった”ということが楽しい、それが理想。楽しい中に剣道の目的が入っている。相手との攻防ができる。打ち合いの中に痛かったこともある。お互いの学びあいもある。協力もある。有効打突の議論もある。決断もある。勇気をもって打ち込んでいく。楽しいということを教師がどう捉えるかが大切です。

